

「ナニ日本橋の出合討ち……ア、伊八、あれは嘘ぢや」

「ゲヘー嘘、ビツクリ仕ましたがな、私は昨夜は一目も寝ずに番を仕て居りました、嘘を吐くに事かへて、旦那さん何故あんな嘘をおつしやつた」

「伊八許せ、あゝ申さんと夜通し寝かし居らん」

(終り)

### 小咄 煙管返して

お女中の鼻聲は千金の値打があると申します。「なあ若旦那」「何んや」「貴方の持つてなアる其の煙管、宜い煙管だんなア」「フム四五日前に出来てきたんや、宜う出来てるやろうがな」「宜い煙管だんな、ナア若旦那、此煙管お呉れやすいな」「あつさり言ひな、何でも呉れくと、今言ふた通り、未だ四五日しか持つてんのや勘忍して、他の物を上げるよつてに」「其様な事を言はんと、若旦那、お呉れやす、厭だつか、吝嗇家やなア」「吝嗇家やないけども、仕事宜う出来てるよつてに、是れは何うも放し難い、代りに何でも他の物を遺るさかひに、是れだけは勘忍して」「其様な事を言はんとお呉れやす若旦那、其の代り貴方の言ひなはる事は、何様な事でも妾聞きますさかひに、是れお呉れやす、若旦那」「私の言ふ事を何様な事でも厭と言はずに、ウンと言ふて聞いて呉れるか」「ハイ、何様な事でも厭と言はずに聞きますさかひにお呉れやす」「宜し遣ろう」「お呉れやすか大きに有難う、貴方のお頼みは」「煙管返して」

## 本誌の編輯方針に就ての私見

野 崎 生

先日紅葉寺で物故落語家の追善法要があつた時散會後列席の諏訪末吉氏より私へこの「上方はなし」の編輯方針に就てお話しがあつた。

現在の上方はなしは落語の専門書になりすぎてゐる、新らし落語のファンをこの雑誌を通じて吸引する建前をとることが必要ではないか、その爲には従來の内容に吟味を加へて解説的な記事を多くすること、誌友を倍加して雑誌の基礎を堅めることを考へてはどうか、といつたお話であつた。その時には一々お答へする時間もなかつたので其の儘になつたがこれは大變にむつかしい問題だと思ふ、と同時に本誌としてもこれに就てはつきりとした考へをもつておくことは決して無駄なことではな

い。私は今日たまくこの雑誌の編輯者といふことになつてはゐるがそれはいつ迄続けられるか判らない、だが竹内君にとつてこの「上方はなし」は畢生の仕事でもあり今後のこともあるだから私はこの雑誌の編輯者といふより私自身の考へといふ意味で一應これらの問題にふれて私見を述べてみたいと思ふ。

幸ひ諏訪氏を始め大方諸賢の御批判と御垂示を賜はれば本誌にとつても幸甚だと考へる。

一體この「上方はなし」の大衆性といふことは前編輯者の中濱氏によつて充分考慮されてゐた問題であつた。中濱氏もこの雑誌を落語の専門雑誌或は落語の入門雑誌とするのではなく広く一般に送り出したいといふ意向だつ